

WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.95

2015.12.25 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.95 目次

ESIマップについて	2-5
施設紹介ー神奈川県自然環境保全センター	6-7
第6回 RITAG会議の開催報告について	8
JICAによる海外技術者研修の一環としての水鳥救護講習の実施	9
寄稿写真のご紹介	10
止まることのない外来生物種問題	11
寄付のお礼	11
事務局日誌	11-12

ESI マップについて

海上災害防止センター 調査研究室 濱田誠一

油流出事故により沿岸に油が接近・漂着した場合に使用する E S I マップと呼ばれる情報図について、2012 年の出された新ガイドラインの内容も含めてご紹介します。

1. E S I マップとは？

E S I マップとは Environmental Sensitivity Index (環境 脆弱 性指標) マップの略で、沿岸に油が接近・漂着した場合に影響が大きい海岸を、「地形」、「生物」、「施設等」の観点から簡潔な色やマークで示した情報図です(図 1)。この情報図は、万が一の油流出事故の際に被害が甚大となる場所、つまり防除を優先させるべき場所を簡潔に示しています。

「地形」は漂着油の自然残留特性や防除作業の難易度と密接に関係しています。例えば、断崖のように波が絶えず海岸に打ち寄せる海岸は、たとえ油が漂着しても波などによる自然作用で漂着油が短時間で洗い流されます。一方、湾奥の湿地や干潟などに漂着した油は自然作用では洗い流されにくく、除去作業も困難で、防除作業自体が湿地や干潟の環境破壊を招く可能性もあり、対応は極めて難しくなります。湿地や干潟は生物の生息域として重要な場所であるため、環境面の被害が大きくなります。

E S I マップは海岸を「油の残留特性」、「防除の難易度」、「環境への影響の大きさ」を基に 10 種に分類し、漂着油の影響がもっとも少ない断崖海岸を E S I = 1、最も影響が大きく防除作業が困難な湿地等を E S I = 10 とし、影響の少ない海岸を寒冷色、影響の大きい海岸を温暖色で区分表示しています。

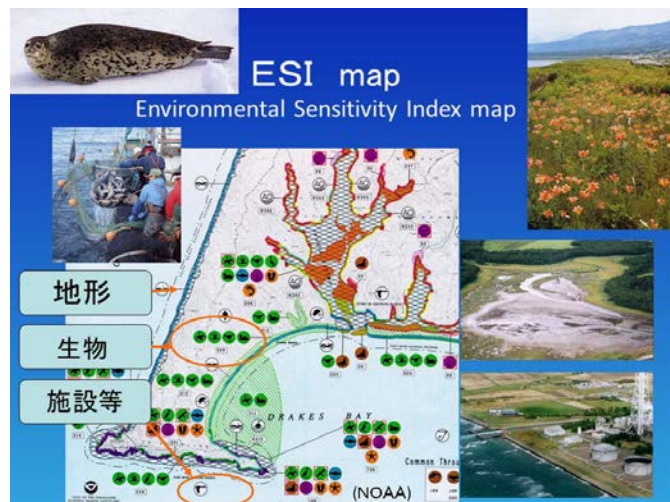


図 1 E S I マップの例 米国 NOAA の情報図 (地形、生物、施設等が示される)

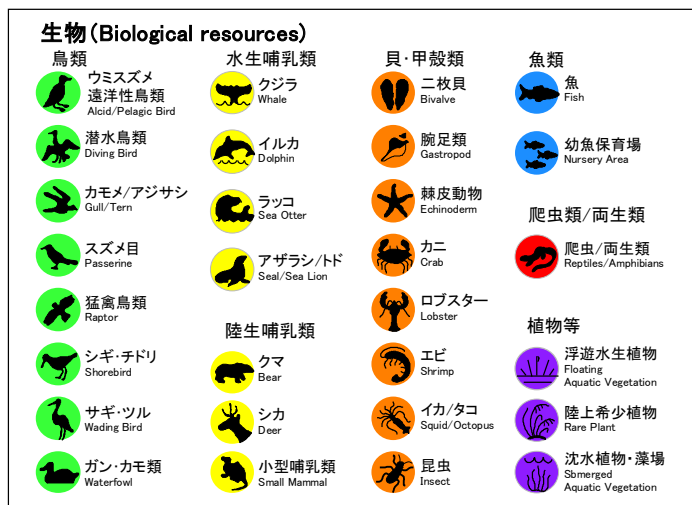


図 2 E S I マップに示される生物に関するマークの例

「生物」に関しては、野生生物の重要な生息域所が、図中にカラーの丸印で示されています。鳥類は緑色、哺乳類は黄色、甲殻類はオレンジ色、爬虫類は赤色のマークで示され、鳥類ではワシ・タカなどの猛禽類をはじめ、ウミスズメなどの遠洋性鳥類、ウミウなどの潜水鳥類、カモメ・アジサシ、ガン・カモ類、シギ・チドリ、サギ・ツルなどが表示されています。哺乳類は、クジラ、イルカ、アザラシ/トドなどの別にマークで示されています。またこれら動物の生息域として重要な、藻場やマングローブの範囲も合わせて示されています。絶滅が危惧される生物や、保護が必要な植生域などは、赤い枠で囲まれたマークとして表示されています。

「施設等」に関しては、発電所や工場、魚介類の養殖施設や種苗生産施設など、常に取水が必要な施設の取水場所や、港、埠頭、貯木場、マリーナ、海水浴場、潮干狩り場などの経済活動に影響を与える場所や人が利用する施設、保護が必要な沿岸の生物保護区、文化財なども合わせて示されています。一方、海岸に車両がアクセスできる場所や、ヘリポートなど防除活動を考える上で重要な情報も表示されています。

E S I マップは 1970 年代から米国において開発され、詳細な作成方法が示されたガイドラインは、米国の NOAA のウェブサイトから公開されています。

2. 新たなガイドライン

2012 年に IPIECA（国際石油産業環境保全連盟）、IMO（国際海事機関）、OGP（国際石油・天然ガス 生産者協会）は E S I マップの新たなガイドラインを公表し（図 3）、これまでの E S I マップをより実効性を高める内容にするため、いくつかの改良点が示されました。

このガイドラインは、IPIECA の以下のサイトからダウンロードできます。

<http://www.ipieca.org/publication/sensitivity-mapping-oil-spill-response-0>



図 3 2012 年に IPIECA 他から出された新たなガイドライン

このガイドラインの大きな点は、大規模油流出事故が発生した際、E S I マップを使用するユーザー別に、目的に合わせた E S I マップが作られていることです。

防除方針を決定する人（Decision maker）は、広範囲を見て漂着油の影響が大きい場所がどこにあるか把握しなければならないため、広範囲を概観できる情報図が作成されます。この情報図は、ガイドラインでは Strategic ESI map（戦略作成用 ESI マップ）と呼ばれます。一方、現場で防除作業をする人（On-site responder）は、現場の地理や潮流の条件など、より詳細な情報を必要としています。ガイドラインでは Operational ESI map（現地作業用 ESI マップ）と呼ばれます。

広域を示す Strategic ESI マップに詳細な情報を全て盛り込むと情報が過多となり、情報図として分かりにくくなってしまいますので、海岸線はシンプルに5段階で分類し、図に表記するのは、干潟や湿地など特に脆弱な海岸線に限られています。

一方、詳細な Operational ESI map では、これまでの E S I マップよりも拡大された詳細な地図で海岸線が分類され、海岸線のみならずその場に流れる潮の流れの向きが示されています（図4）。

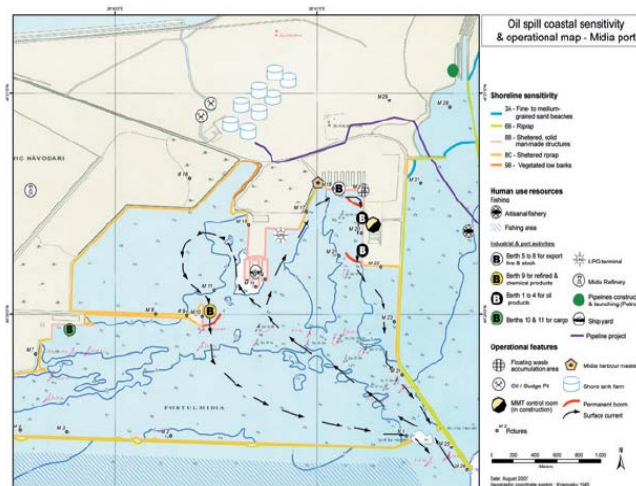


図4 現場作業用の詳細な Operational ESI map（図中の黒矢印は潮流の向きを示す）

油流出事故時に現場対応を行う海上災害防止センターでは、この Operational ESI map を中心に情報図の作成を進めています。情報図を作成する海域においては、現場海域において大潮の上げ潮、下げ潮時に、潮流観測を行っています。潮流観測では、GPSを内蔵した図5のような漂流ブイを海に投入し、ブイの位置変化を5秒程度の間隔でGPSに記録し、その位置変化のデータから潮流の方向と速さを求めています。

水面を漂流する油は、潮流の動きに加え、風速の3%程度の影響を受けて漂流しますが、ESIマップ作成においては、時々に変化する風の影響を省き、潮流による海水そのものの動きのみを調査することとしています。そのためブイの形状は、極力風の影響を受けないよう水面上に出る部分を小さくし、水中部分で水の抵抗を受ける面積を増やす構造となっており、ブイの下部に抵抗板（ドローグ）を付けています。

生物の生息環境や水の動きを評価する上でも、このようなブイによる流れの調査は簡易かつ有効な調査方法です。



図5 調査に使用する漂流ブイ

3. 新ガイドラインに示される生物保護区に関する情報

ESIマップには、生物多様性保護の観点から生物保護区に関する情報が示されていますが、新ガイドラインには具体的なデータベースが示されています。

世界各国の生物保護区については、UNEP-WCMC（国際連合環境計画 世界自然保全モニタリングセンター）のIBAT(Integrated Biodiversity Assessment Tool)と呼ばれるツ

ルや、以下の protected planet のウェブサイトから世界の保護区 (WDPA : World Database of Protected Areas) を自由に検索、閲覧することができます。

<http://www.protectedplanet.net/>

このデータベースでは、名称、保護区の範囲、分類（世界遺産、国指定鳥獣保護区、都道府県指定鳥獣保護区）、面積等が示されています。図6に知床世界自然遺産の例を示します。

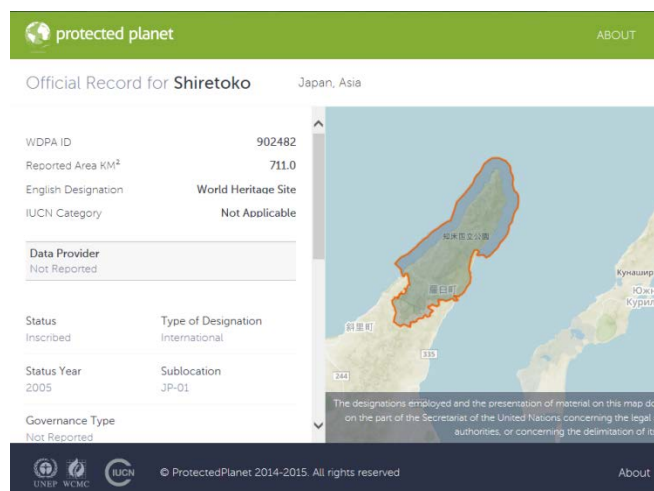


図6 UNEP-WCMCのIBATに表示される生物保護区の例（知床世界自然遺産）

また、絶滅危惧種のデータベースとしては、IUCN（国際自然保護連合）のレッドリスト（図7）がガイドラインに示されています。

このレッドリストの情報は以下のウェブサイトから見るができます。

<http://www.iucnredlist.org/>

（IUCN レッドリスト検索ページ）

<http://maps.iucnredlist.org/>

（レッドリストマップ）

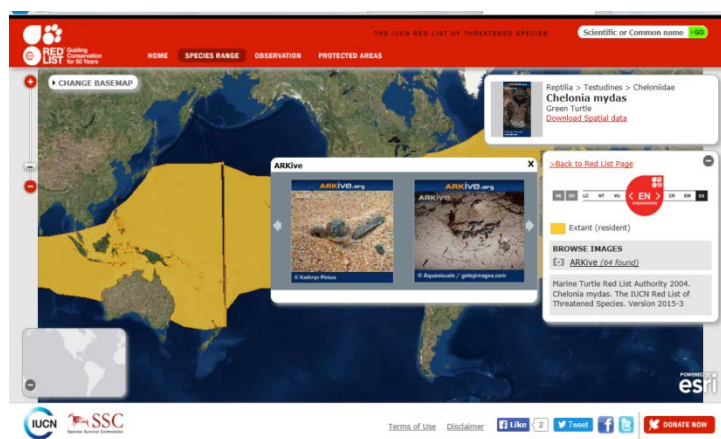


図7 IUCNのレッドリスト検索ページ（アオウミガメの例）

IUCNのレッドリストには、絶滅が危惧される野生動植物について、絶滅危惧のランク別に地域や生息環境別に検索することが可能であり、生息範囲が地図に示され、参考写真を見ることができます。

新ガイドラインにはESIマップ作成にあたって、これらの情報が有効であることが示されています。

しかし、沿岸の水鳥や哺乳類など生物情報については生物を普段見ている方々の情報が最も詳細で具体的です。どのような場所に水鳥などが集まっているか、またどの時期に水鳥がどんな活動をしているかといった情報がESIマップには重要であり、生物を普段観察している方たちの情報を、ESIマップにいかに関与させるかということが今後の課題となっています。

以上

神奈川県自然環境保全センター

神奈川県自然環境保全センター自然保護課 井 上 史

【施設概要】

神奈川県自然環境保全センターは、神奈川県の県央地域である厚木市北部の自然豊かな場所にあります。

傷病鳥獣の救護業務については、自然保護公園部自然保護課が担当しており、前身の自然保護センターが、鳥獣保護思想の普及のもと昭和53年から始めたものを引き継ぎ、現在に至っています。

施設は、鳥獣保護棟に受付と飼育室（主に鳥類）が、傷病鳥獣治療飼育舎には処置室と飼育室（主に哺乳類）があり、外には自然保護センター設立時に建てられたフライングケージに加え、野生動物救護ボランティア（後述）の皆さんのご協力で建てられた複数の鳥獣舎があります。

スタッフは、常勤職員（獣医師）1名、非常勤職員3名（獣医師1名、飼育担当2名）の計4名体制で、年末年始を除いて毎日9時から16時30分まで傷病鳥獣の受入れをしています。



鳥獣保護棟



傷病鳥獣治療飼育舎



フライングケージ

【傷病鳥獣保護業務】

県民の方が県内で保護した野生の傷病鳥獣を、当センターに運んでいただいたものを収容、治療して、必要に応じてリハビリを行い、野生に戻す業務を中心に行っています。

春から夏にかけては、保護されたひなの持込みが多いだけでなく、電話による問い合わせも多く寄せられ、ひなの世話に加えその対応にも追われます。また、秋の声を聞くと疥癬症や交通事故のタヌキ等を中心に重症の野生動物が持ち込まれ、その治療に追われることから、なかなか心休まる時がありません。

過去五年間の保護状況

年度別	平成26年度		平成25年度		平成24年度		平成23年度		平成22年度	
鳥 類	464	(32)	457	(22)	496	(29)	542	(49)	509	(40)
哺乳類	71	(3)	64	(1)	95	(7)	91	(5)	95	(1)
計	535	(35)	521	(23)	591	(36)	633	(54)	604	(41)

過去年間の種別上位保護点数

年度別 順位	平成26年度		平成25年度		平成24年度		平成23年度		平成22年度	
	種 名	点 数	種 名	点 数	種 名	点 数	種 名	点 数	種 名	点 数
1	ツバメ	91	ツバメ	101	ツバメ	89	ツバメ	77	ツバメ	89
2	スズメ	81	スズメ	76	スズメ	59	スズメ	74	スズメ	85
3	タヌキ	38	キジバト	43	キジバト	40	キジバト	61	タヌキ	46
4	ヒヨドリ	37	ヒヨドリ	35	ヒヨドリ	39	ムクドリ	43	キジバト	43
5	キジバト	33	タヌキ	33	メジロ	38	シジュウカラ	41	ヒヨドリ	36
6	ムクドリ	32	ムクドリ	23	ムクドリ	28	タヌキ	39	ムクドリ	35
7	メジロ	22	シジュウカラ	21	タヌキ	28	ヒヨドリ	35	メジロ	24
8	シジュウカラ	21	カルガモ	16	ゴイサギ	25	メジロ	20	カルガモ	23
9	ハクセキレイ	19	アブラコウモリ	15	シジュウカラ	23	カルガモ	16	アブラコウモリ	20
10	アブラコウモリ	18	ハクセキレイ	11	アブラコウモリ	23	ハクビシン	16	イワツバメ	15

【ボランティアの活動】

当センターでは限られたスタッフで業務をこなしていることから、野生動物救護ボランティアの方々はなくてはならない存在です。

平成9年度よりスタートした野生動物救護ボランティア登録制度ですが、毎年募集しているボランティア講習会（公益社団法人神奈川県獣医師会及びNPO 法人神奈川県野生動物救護の会との共催）を受講した後ボランティア登録をし、活動していただいています。

活動内容としては、当センターに保護されている鳥獣の世話が中心となりますが、野生に返すためのリハビリが出来るような鳥獣舎を造ったり、老朽化した鳥獣舎の修繕をしていただいたりする他、救護された動物のデータ解析、学校等へ出向いての環境教育、普及啓発活動など、それぞれの方の得意分野で頑張ってもらっています。

平成26年度の活動人数は年間延べ1,036人で、平成19年度以降、毎年1,000人を超える方々にご参加いただいています。



ボランティア講習会



手作りのフライングケージ



ボランティア活動風景

＜過去五年間のボランティアの登録状況＞

年度別	平成26年度	平成25年度	平成24年度	平成23年度	平成22年度
ボランティア登録数	256	245	193	210	248

*：ボランティア登録数は、各年度の3月31日現在

【普及啓発活動】

神奈川県は全国第二位の人口を抱え、生活基盤としてインフラ整備が進んでいく一方で、地形の変化に富み、豊かな自然に囲まれた地域に恵まれていることから、様々な野生動物が生息しています。しかし、そうした中で人間と野生動物の間で生まれた軋轢により、怪我をしたり病気になったりした野生動物が、救護される機会が増えていることも事実です。

そこで、救護される動物を増やさないための普及啓発活動も、私達の重要な業務であるといえます。その一環として今年度より年二回、「救護動物特別公開」と銘打って、当センターに救護された一部の動物達を公開するとともに、パネルや標本を展示し、普段は近くで見ることの出来ない野生動物達をじっくり観察できる機会を設けています。次回の公開日は平成28年3月13日（日）13時30分～15時30分となっていますので、足を運んでいただけたらと思います。また、常設の展示施設においても、自然の仕組みや自然再生の取り組みを紹介していますので、そちらの方にも是非お立ち寄りください。



施設公開風景



第6回 R I T A G会議の開催報告について

一般財団法人海上災害防止センター
防災部 業務二課 山崎 亮平

平成27年10月6日(火)～7日(水)の2日間にわたり、第6回 RITAG 会議を横浜で開催致しましたので、その結果をご報告致します。

RITAG(Regional Industrial Technical Advisory Group)とは、平成22年に発生したメキシコ湾の原油プラットフォーム(Deepwater Horizon)での原油暴噴事故を契機として、アジア地域における海洋油田やタンカーから油が流出した対応について、アジア各国の民間流出事故対応組織が年1回一堂に会して、事故報告や技術開発などについて協議する会合です。

油防除に係る技術は世界各国共通の重要なテーマであり常に進歩しております。このため、海上災害防止センターでは、このような RITAG の枠組み等を通じて、各国の取組みを把握し、有用な情報に関しては国内で情報発信しサービスを充実させるとともに、将来的な国際業務展開の足掛かりとするため、今回会議を主催したものです。

今回の会合では、シンガポール、中国、韓国、タイ、マレーシア、インドネシア、日本の7か国、合計12機関から発表が行われました。

この会議のなか、我が国の水鳥救護の専門家として、

○ NPO 法人 NRDA アジア 理事長 植松一良様

○ 学校法人 東京環境工科学園 東京環境工科専門学校 特任教員 皆川康雄様
にお越し頂き、環境省油汚染事故対策水鳥救護研修(以下「水鳥研修」と言う。)や油汚染事故対策水鳥救護の国際的な枠組みなどに関して発表して頂きました。

RITAG 参加国の中では、油に汚染された水鳥(以下「オイルドバード」と言う。)の救護ボランティア育成を行っているのは日本のみであり、「日本の研修カリキュラムは米国等が実施しているカリキュラムに沿ったものか」、「講師として来て頂くことは可能か」といった質問が多数寄せられるなど、関心の高さが窺えました。

不幸にも大規模な油汚染事故が発生した場合の「オイルドバード」への対応は、当センターとしても非常に重要視しております。

このため、実際の事故でボランティア活動を担って頂くこととなる水鳥研修の参加者には、当センターから、油防除に関する研修として、「オイルドバード」を一時的に保管することができる施設「ワイルドレスキューシステム」の取扱いを実演させて頂くなど、野生動物救護獣医師協会との緊密な連携協力を図っております。



「オイルドバード」の写真



「ワイルドレスキューシステム」の実演

JICAによる海外技術者研修の一環としての水鳥救護講習の実施

WRV事務局長 箕輪 多津男

去る11月11日(水)、環境省水鳥救護研修センターにて、JICAによる「海上保安実務者のための救難・環境防災コース」と題する海外技術者研修の一環として、「油汚染事故に関わる水鳥救護講習会」が実施されました。本講習に関しては当初、海上保安庁より連絡及び依頼をいただき、それに応える形で実施する運びとなった次第ですが、毎年実施されているコースとは言え、油汚染鳥救護に関する内容が取り入れられたのは初めてということでしたので、実施できたことの意義は大変大きかったものと思われます。

当日は、インドネシア、マレーシア、フィリピン、スリランカ、ベトナム、及びアフリカのジブチの6か国から計16名の参加者を迎え、これに海上保安庁や海事コンサルタントのIMOSの関係者等が加わり、満席状態で進められました。なお、今回は半日のコースということで、前半の講義の後、水鳥の処置および洗浄実技のデモンストレーションという内容で行われました。

まず、講義については、WRVの理事及び大阪支部長である中津賞先生にお願いしました。当日は、「Rescue and Rehabilitation skills for oiled birds」と題して、英語による講義をしていただきましたが、講義後の活発な質疑応答の様子などからも、参加者や関係者から大きな反響をいただいたことが実感されました。

続いて、WRV神奈川支部・事務局長の皆川康雄先生に加わっていただき、水鳥を使ったデモンストレーションに移りました。今回の参加者は、各国の海上保安または海上警察の関係者ばかりでしたので、普段はまず水鳥に触れる機会もなかったようですが、中で唯一の女性参加者であったインドネシアのルルク氏が、かつて看護師をしておられたとのことで、殊のほかアイガモに興味を示され、積極的な姿勢を示されたのが印象的でした。中津、皆川の両先生には非常に慣れた形で大変スムーズに一連の作業及び解説を行っていただき、その間、順次参加者からの質問にも答えながら、非常に和やかな雰囲気の中で講習が進められていきました。

デモンストレーションを終えた後、再度、全体的な質疑応答を行い、最後に参加者全員で記念撮影をして、無事、今回の講習会は終了となりました。WRVがこうしたJICAによる海外の技術者向けの講習を実施するというのも、おそらく初めてだったのではと思われますが、今後も機会があれば、是非こうした講習会の開催に協力していければと考える次第です。

最後に、今回の講義及びデモンストレーションを実施していただいた中津先生と皆川先生を始め、講習会をご依頼いただいたJICAや海上保安庁、IMOSの関係の方々、および当日参加いただいた海外の技術者の方々に、改めて感謝の意を表したく存じます。



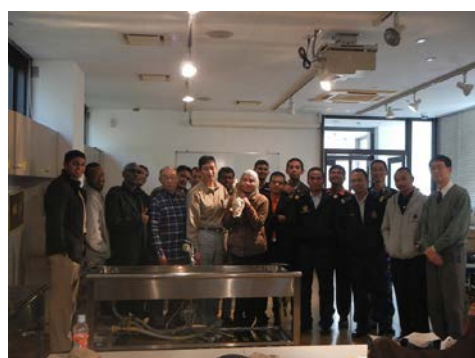
中津先生による講義



参加者(海外技術者)の様子



デモンストレーションの様子



参加者一同による記念撮影

寄稿写真のご紹介

長島順子さんから以前お送りいただいた写真を改めてご紹介させていただきます
今回は、複数個体が写っているものを中心に掲載いたします。



ホンドタヌキ

撮影者：長島順子さん（WRV会員）
撮影場所：長野県上田市武石地区



ホンシュウジカ



ホンドテン



ホンドギツネ



ニホンアナグマ

※WRV ホームページ上のカラー版も是非ご覧ください。

(WRV ホームページアドレス：<http://www.wrvj.org/>)

※なお長島順子さんは、WRVで以前会長を務められた故・森田斌先生の病院（ダクタリ動物病院国立病院）に長く勤務されていた方です。

● 止まることのない外来生物種問題 ●

去る9月に開催された「日本鳥学会 2015 年度大会」において、外来鳥類をテーマとする自由集会に参加したところ、高知県と愛媛県でサンジャクの野生化が確認されたことを知り、愕然といたしました。サンジャクについては私も中国で観察した経験があり、長い尾をした大変美しい鳥ですが、決して日本にいるべき鳥ではありません。カラス科の鳥のため雑食性で、下手をするとこれからどんどん広がっていく心配があります。原因は、やはり愛媛県内のある飼育施設からの放野ということのようですが、こうした無責任な事態は一向に止む気配がありません。そう言えば近似種のカササギも、各地で不自然な生息確認が相次いでおりますが、ほとんどの場合、背景に人為的な要因が働いていることは間違いないようです。



一方、最近では外来昆虫等についても、深刻な事態に陥りかねない状況が発生してきております。例えば、輸入木材等に紛れて侵入し、乾燥にも大変強く、家屋に多くの被害をもたらしながら分布を広げているアメリカカンザイシロアリ、1993年に広島県廿日市市で発見されて以来、他の在来種を圧倒しながら徐々に広がり、人間生活にも被害を与えかねないアルゼンチンアリ、既に長崎県の対馬に定着し、その繁殖力と攻撃性から、もし九州を始め日本各地に分布を広げてしまった場合、養蜂業への被害だけでなく、人体への直接的な危害が心配されるツマアカスズメバチなど、どれも社会性昆虫ということもあり、最も懸念されている外来昆虫種と言えます。また、昆虫ではありませんが、一時期大いに話題となったセアカゴケグモも、既にほぼ日本全土に分布を広げており、これまで大きな実害は確認されていないものの、オーストラリアでは咬毒による死亡例もあるため、今後は十分注意が必要な種と言えます。このように、小型で目立たないようでありながら、日本の生態系や人間生活を脅かしつつある外来生物種は後を絶ちません。

既に全47都道府県に広がってしまったアライグマを始め、タイワンリス、タイワンザル、アカミミガメ、カミツキガメ、ウシガエル、ブラックバス(オオクチバス)等々、哺乳類や爬虫類、両生類、魚類の外来種が数多く定着してしまった状況を併せて考えると、ある種絶望的な感情に苛まれてしまいそうですが、かと言って、このまま手を拱いて事態を放置する訳にはいきません。遠い将来を見据えながらも、やはり私たちのできることから実行に移していくしかないのです。ただし、こうしたそれぞれの外来生物種は、移された先々で懸命に生きようとしているだけであって、実際は何も悪くありません。すべての責任は、結果的にこれらを人為的に持ち込んだ私たち人間の側にあるのです。このことを決して忘れてはならないでしょう。(WRV事務局 箕輪)

【 事務局より寄付のお礼 】 寄付ご協力者(敬称略) (平成27年9月1日から平成27年11月30日)

○寄付金 10.3 2015 動物感謝デー in JAPAN (募金箱) 1,905 円 11.17 タカイナオト 50 円
○神奈川支部寄付金 9.19 神奈川県野生動物リハビリター (スマイリングフェア) 7,800 円
9.20 神奈川県野生動物リハビリター (川崎動物愛護フェスティバル) 2,500 円 10.3 麻生区ふれあい公園(募金箱)1,525 円
11.1 神奈川県野生動物リハビリター(森とせせらぎまつり)700 円 11.3 青葉区民まつり(募金箱) 1,056 円
11.15 秋の動物園まつり (募金箱) 2,000 円 11.15 神奈川県野生動物リハビリター (秋の動物園まつり) 1,200 円

事務局日誌 2015.9.14～2015.12.13

=== 9 月 ===

16～17：日獣大獣医学科・野鳥救護実習、水鳥救護実習 (水鳥救護研修センター) 対応：羽山、加藤、皆川、箕輪、曾根
18：東京環境工科専門学校生・リハビリテーション実習 [神奈川支部] 対応：皆川
18：大阪市天王寺動物公園・訪問 対応：箕輪
19：日本鳥学会・2015 年度大会 (兵庫県立大学) 出席：箕輪
19～20：第4回大阪野生動物リハビリター養成講座・第3回講習 (ベピイ動物専門学校) [大阪支部] 対応：中津、箕輪
19：スマイリングフェア (神奈川県立東高根森林公園) [神奈川支部] 対応：皆川
20：金沢文庫芸術祭 (横浜海の公園) [神奈川支部] 対応：皆川
20：川崎動物愛護フェスティバル (宮前市民館・区役所) [神奈川支部] 対応：皆川
25：WRV ニュースレターNo.94 発行
26～27：神奈川県野生動物リハビリター(2級)養成講習会 [神奈川支部] 対応：馬場、皆川、大窪、梶ヶ谷、金坂、箕輪

=== 10 月 ===

01：第28回わいわいサロン (かながわ県民サポートセンター) [神奈川支部] 出席：皆川
03：2014 動物感謝デー in JAPAN (駒沢オリンピック公園) 対応：新妻、小松、須田、箕輪、曾根
03：麻生区ふれあい公園 (王禅寺ふるさと公園) [神奈川支部] 対応：皆川
05：傷病鳥獣救護に関する集団ヒアリング (環境省・自然環境研究センター) [神奈川支部] 出席：皆川

06～07：海洋汚染事故対応に関する技術者(アジア諸国)協議会(横浜ベイホテル東急) 発表：植松、皆川、ワグザバー：箕輪
 10：環境未来フェア(東松山市・松山市民活動センター) 対応：新妻
 10,12,11/3：ミゾゴイ(傷病個体)のガイド(野毛山動物園・ミゾゴイ展示場前)[神奈川支部] 対応：皆川
 10,31：神奈川県野生動物リハビリテーター養成講座(実践活動)[神奈川支部] 対応：馬場、皆川
 14：JICA「海外保安実務者のための救護・環境防災研修」打合せ(海上保安庁) 対応：箕輪
 16：たかさか動物病院(小山先生)訪問＜傷病鳥獣の件＞ 対応：新妻、箕輪
 17：金沢まつりいきいきフェスタ(海の公園)[神奈川支部] 対応：皆川
 25：第4回大阪野生動物リハビリテーター養成講座・第4回講習(ペピイ動物専門学校)[大阪支部] 対応：中津
 25：麻布大学・大学祭(麻布大学) 対応：新妻
 25：多摩川釣り針・釣り糸調査[神奈川支部] 対応：皆川
 26：「安全・安心な都市・地域の創造」講演会＜災害動物医療研究会＞ 出席：羽山、皆川
 31～11/1：ジャパンボードフェスティバル2015(我孫子市)[神奈川支部] 対応：皆川

=== 11月 ===

01：森とせせらぎまつり(野生動物ボランティアセンター)[神奈川支部] 対応：馬場、皆川
 01,14：神奈川県野生動物リハビリテーター養成講座(実践活動)[神奈川支部] 対応：馬場、皆川
 03：青葉区民まつり(青葉区総合庁舎周辺)[神奈川支部] 対応：皆川
 07～08：どうぶつえんの文化祭(金沢動物園)[神奈川支部] 対応：皆川
 08：多摩川釣り針・釣り糸調査[神奈川支部] 対応：皆川
 09～10：第1回油等汚染事故対策水鳥救護研修(水鳥救護研修センター) 対応：中津、新妻、皆川、大窪、箕輪、曾根
 11：JICA「海外保安実務者のための救護・環境防災研修」(水鳥救護研修センター) 対応：中津、皆川、箕輪、曾根
 12：麻布大学東京同窓会(スクワール麹町) 出席：新妻
 15：秋の動物園まつり(夢見ヶ崎動物公園)[神奈川支部] 対応：馬場、皆川
 16：税務行政表彰式(勤労福祉会館) 出席：新妻
 16,30：帝京科学大学・救護実習：初期対応(帝京科学大学) 対応：箕輪
 17,12/1：帝京科学大学・救護実習(帝京科学大学)[神奈川支部] 対応：皆川
 11,18,25,26,12/2：NPO マネジメント講座、広報発信力強化講座(かながわ県民サポートセンター)[神奈川支部] 出席：皆川
 20：「地域創生シンポジウム」((公財)日本生態系協会)[神奈川支部] 出席：皆川
 21：第20回藤沢環境フェア(藤沢市)[神奈川支部] 対応：皆川
 21～22：第36回動物臨床医学会年次大会(グランキューブ大阪) 出席：大窪
 23：東京環境工科専門学校生・野生動物保護管理実習(宮ヶ瀬湖ビジターセンター)[神奈川支部] 対応：皆川
 23：長浜公園感謝DAY(横浜市金沢区)[神奈川支部] 対応：皆川
 24：傷病鳥獣救護のあり方・有識者会議(環境省・自然環境研究センター)[神奈川支部] 対応：皆川
 26：西青会獣医師支部研修会(西青会会議室) 出席：新妻
 27：「安全・安心な都市・地域の創造」講演会＜災害動物医療研究会＞ 出席：羽山、加藤、皆川
 28：麻布大学同窓会・理事会(麻布大学) 対応：新妻
 29：第4回大阪野生動物リハビリテーター養成講座・第5回講習(ペピイ動物専門学校)[大阪支部] 対応：中津
 29：日本伝統獣医学会(麹町会館) 出席：新妻
 29：「コウノトリ保全フォーラム」(東京都美術館) 出席：箕輪、皆川

=== 12月 ===

01：(公財)東京都獣医師会 南多摩支部 学術講習会(水鳥救護研修センター) 対応：大窪
 05～06：第1回VMAT講習会(高崎)＜災害動物医療研究会＞ 出席：羽山、皆川
 06：野生動物救護研修会((公社)和歌山県獣医師会)[大阪支部] 講師：中津
 07～08：第2回油等汚染事故対策水鳥救護研修(水鳥救護研修センター) 対応：中津、新妻、皆川、大窪、箕輪、曾根、藤平
 10：愛鳥懇話会(日比谷松本楼) 出席：小松
 11：道路生態研究会設立総会&第1回研究会 出席：皆川
 12：東京港野鳥公園・油汚染事故水鳥救護講習会[東京都支部] 対応：新妻、大窪、皆川、箕輪

野生動物救護獣医師協会 (ホームページ) <http://www.wrvj.org/> (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No.95 2015.12.25 発行

発行：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局：〒190-0013 東京都立川市富士見町1-23-16 富士パークビル302 TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人：新妻 勲夫 編集文責：小松 泰史 編集担当：箕輪多津男
